

宇都宮太郎将軍の三・一独立運動の 鎮圧過程に見られた朝鮮認識

ビオンティーノ・ユリアン*
biontino@naver.com

<目次>

- | | |
|-----------------------------------|----------------|
| 1. はじめに | 5. 宇都宮太郎の朝鮮人人脈 |
| 2. 宇都宮太郎の生涯 | 6. 宇都宮太郎の朝鮮認識 |
| 3. 宇都宮太郎の日記と先行研究について | 7. おわりに |
| 4. 宇都宮太郎が三・一独立運動の鎮圧段階で
引き受けた役割 | |

主題語: 宇都宮太郎(Utsunomiya Tarô)、朝鮮統治(Japanese Colonialization of Korea)、三・一独立運動(March First Movement)、兵力による鎮圧(military suppression)、アジア主義思想(Asianist thought)

1. はじめに

周知の通り、1919年3月1日、日本帝国支配下の朝鮮では三・一独立運動が起こったが、1918年から1921年まで朝鮮軍の司令官は宇都宮太郎であったため、三・一独立運動の鎮圧は当時日本陸軍中將軍であった宇都宮の責任であった。ところで、2002年から2007年に及ぶ『宇都宮太郎関係資料研究会』の努力により、当時宇都宮が詳しく綴った日記が『日本陸軍とアジア政策―陸軍大将宇都宮太郎日記』という題で岩波書店から3巻で出版された。1)

筆者は2007年の出版された当時から修士論文を準備し、2010年の夏に『宇都宮太郎将軍と三・一独立運動』というタイトルで、ドイツ・ハイデルベルク大学日本学科の大学院を卒業した。それは、『宇都宮太郎関係資料研究会』による日記の解読とその編集段階で報告され

* 서울대학교 大學院 博士課程

1) 宇都宮太郎資料研究会編(2007)『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』岩波書店。(以下、『宇都宮日記』と略する)

た研究論文ならびに日記の改題を参考にしながら、日記の内容分析と宇都宮が書いた他の文の調査を通して、彼の考える朝鮮と帝国主義思想ならびに彼が三・一独立運動で果たした役割について調べたものであった。つまり、彼の日記を通して三・一独立運動の鎮圧過程の検証を試みたわけだが、それまでドイツでは三・一独立運動に関する研究が殆どなかった。幸い筆者の論文は良い評価を受け、ドイツの学術雑誌に掲載されることになったが、韓国において研究を重ねるうちに、その論文がさまざまな点で至らないという自覚にいたった。論文では彼の軍人としてのあり方と思想に関して言及してはいるものの、資料不足のために、彼の行動がもたらす意味とその影響力について、多くに触れる自信がなかったのである。

ところが、韓国での修学は日本統治時代の背景の理解を深め、それによって包括的で詳細な宇都宮の現実の把握が可能になり、彼にたいする評価がより深く行えるようになった。さらに、ドイツでは入手できなかった資料と2010年の夏以降に刊行された宇都宮に関する研究も参照することができた。ここでは、修士論文の内容を補足しながら論を進めることにするが、まず、ドイツ人である筆者に宇都宮の生涯と彼の日記がどう見えたかを述べることにしたい。その上で、彼が三・一独立運動の鎮圧過程で担当した役割について説明することにする。宇都宮は武力鎮圧を指導した本人でありながら、朝鮮人との親密な交流の経験を通して、自分が朝鮮人の心情やそのおかれた状況を把握してると信じていた。彼は朝鮮人の心をつかむためには、そのような信頼を土台に、暴力に訴えるのではなく改革の必要性を確信し、それに関連する思想を発表し始めることになったのである。

ここでは、宇都宮の思想や朝鮮に対する認識が、彼の構想する「文化政策」や彼の上司に対して、どのような影響を及ぼしているかに焦点を当てて調べることにしたい。

2. 宇都宮太郎の生涯

宇都宮は1861年に佐賀県で生まれ、1877年の西南戦争の頃、軍人となる道を撰んだ。日本陸軍士官学校と陸軍大学校を卒業し、東京にある日本軍中央部に勤務していたころは中国専門家という評価を受けるほどの中国通であった。その一方で、1901年から1905年には英国の日本大使館部の陸軍務官として、英国帝国主義に直に接する機会も得ている。東京に戻った後、佐賀出身の宇都宮は主要軍閥だった長州派と対立し、陸軍における長州派の

陸軍独占に反対した。長州派は長州出身の田中義一を用い、宇都宮を師団長として北海道と大阪に派遣し、東京における影響力を遮断しようとした。これに対し宇都宮は再び東京に帰る機会を待ち、派遣地域では自らの職分を忠実に遂行した。ところが、不本意にも、朝鮮軍司令官に任命され、当地に派遣されることになったのである。²⁾

日記に見れるように、宇都宮は朝鮮で「閑職」を予想した。それでも、彼は1918年8月12日から朝鮮での勤務に着手し、まず多くの視察旅行をした。その結果、朝鮮の社会基盤施設の改善の必要性を悟った。ところが、1919年3月1日から彼の生活は突如せわしくなった。憲兵が三・一獨立運動を十分に鎮圧できなかったため、軍隊の派遣を要請されたからである。資料から宇都宮が軍隊を派遣しつつも暴力の使用には厳しい制限したことがわかるが、朝鮮人の抵抗が激しく、ついに軍事力行使に至る。そして、とうとう1919年4月15日、いわゆる「提岩里事件」が発生した。その事件の処分に関して、宇都宮は彼の上司の長谷川好道朝鮮総督と衝突しただけでなく、朝鮮で布教していた外国人宣教師からも批判も受けた。³⁾

当時、宇都宮自身は朝鮮人との親密な交流を通して、朝鮮人の心や状況を把握したと信じていた。朝鮮人の心をつかむためには暴力ではなく改革が必要であることを確信した宇都宮は、朝鮮の未来に関する自らの考えを披瀝し、周りの軍人、朝鮮人の友人、彼を支援する者などの動員を試みた。そのころ、長谷川好道が辞職し、宇都宮に好意的な齋藤實(1858-1936)が就任することになったが、宇都宮は1921年に胃癌のため帰国し、一年後の1922年2月14日、ついに死に至った。⁴⁾

3. 宇都宮太郎の日記と先行研究について

宇都宮太郎の死後、彼の日記は長男の宇都宮徳馬(1906-2000)が保管した。周知のとおり、徳馬は有名な自民党の政治家かつ事業家であり、また軍備縮小の活動家でもあった。彼の死後、日記が『宇都宮太郎関係資料研究会』に預けられることになり、その研究会は日

2) 『宇都宮日記第三巻』1918年7月24日, p.128

3) 吉良芳恵(2005)「宇都宮太郎関係資料からみた三・一獨立運動 陸軍中央との関係を中心に」『史艸』46号, p.160

4) 齋藤聖二(2007)「第一巻解題 明治期の宇都宮太郎 駐英武官・連隊長・参謀本部第二部長」宇都宮太郎資料研究会編(2007)『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』岩波書店, pp.10-14, 24-25;宮本正明(2010)「宇都宮太郎と朝鮮支配」安田常雄、趙景達編『近代日本のなかの韓国併合』東京堂出版, pp.156-158

記の発刊を準備した。原作の手書き日記は15冊からなるが、発刊は総三冊で、1900年、1907年から1916年、そして1918年から1921年度の日記が収録されている。それだけでなく、『宇都宮太郎関係資料研究会』が行ったシンポジウムや会員の論文やが収録されたり、日記の読み方や解釈も提供されている。『日本陸軍とアジア政策』という題名が示すように、アジアに対する関心の強さが表れており、晩年の朝鮮での勤務や三・一独立の鎮圧だけではなく、1911年の中国の辛亥革命の政策決定過程にまで及んでいる。⁵⁾

ところで、ドイツにおける自己証言文⁶⁾の研究の中で興味深いものは、日記がなぜそれほど遅く発見されたのかということと、日記を書く主体の習慣にたいする疑問である。宇都宮は死亡五ヶ月前まで、旅行中でも欠かさずほとんど毎日日記を綴っていたので、その量は決して少なくはない。また、一日の分量も多く、内容也多岐にわたっている。当然 彼の軍人としての勤務と生活についての内容が主となつてはいるが、家庭に関する記録も少なくない。欄外にもメモを頻繁に残しており、一日の要点など一目で情報を探せるように書いてあることからみて、彼が後日、日記を頻繁に参照していたことがわかる。このように、彼にとって日記は生活の整理道具でもあり、見る度に記憶を呼び起こさせる機能も果たしたはずである。

日記の記述にあたって、宇都宮は自ら記述方式を明らかにしてはいないが、怒りや喜びなどの感情を表現する部分も少なくなく、当日か次の日に記録していたと思われる。登場する人物についてはざっくりばらんに言及しているものの、日付に間違いは見つけられない。これらのことから、『宇都宮太郎関係資料研究会』が示す通り、宇都宮は日記を伝記編纂の材料として使われること、つまり、数年後に彼の記録が発行されることを念頭において書いたものと思われる。文体については評価し難いが、文章の長さや漢字使いから、高い教育程度が確認できる。⁷⁾

さらに、『宇都宮太郎関係資料研究会』は、宇都宮徳馬が父親の日記を公表しなかった理由が彼の様々な活動による多忙と、宇都宮徳馬と父親太郎の対蹠的な経歴にあると考えている。軍縮を説いた宇都宮徳馬は、長男に立派な軍人になって欲しいという父の志に沿え

5) 吉良芳恵(2007)「刊行にあたって」宇都宮太郎資料研究会編(2007)『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第一巻、岩波書店、p.xi

6) ドイツでは近来、Ego-Documentsの研究が盛んである。歴史学視点から歴史の中の「自分」について証言する文書、つまり日記だけではなく、多用な資料(自伝、手紙、ノートなど、一人称がよく使われる文章)を使い、分析の新しい視野を開こうとする研究である。代表的な研究者としてベルリン自由大学のClaudia Ulbrichtなどをあげることができる。

7) 吉良芳恵(2007)「刊行にあたって」、p.x; Smith, Sidonie, Watson, Julia(2001) Reading Autobiography. A Guide for Interpreting Life Narratives, Minneapolis: University of Minnesota Press, pp.21-24, 79-80, 173

なかった。彼は自分の選んだ道の動機として、父親の軍人としてのキャリアと、それから受けたストレスによる尚早の病死をあげている。徳馬は、父親の残した記録の内容を知らない状態で、次世代にその評価を託そうとしたと思われる。⁸⁾

宇都宮太郎日記の刊行まで、宇都宮を対象とした先行研究はほとんど見当たらないが、その理由は宇都宮に関する資料自体が少なかったためであろう。筆者は政治学者である伊藤成彦の『物語日本国憲法第九条』(2001)で、はじめて宇都宮太郎と三・一独立運動の關係について知ることになったが、伊藤のおおざっぱで不正確な記述はまさに日記刊行前の資料不足を証明している。日本軍の研究者の間で、宇都宮は桂太郎と仙波太郎と共に「陸軍三太郎」の一人として知られていることにみれるように、宇都宮が陸軍で果たした重要な役割は認められていた。『上原勇作関係文書』に保管された彼の書簡と彼が残した意見書と書類をもとに、北岡伸一が1978年に出版した『日本陸軍と大陸政策』では、宇都宮が辛亥革命当時果たした政策決定過程で担った役割が描かれている。松下芳男の他、大江志乃夫の研究にも宇都宮が現れてはいるが、彼の軍隊での立場を越える内容は見当たらない。しかし、大江志乃夫は宇都宮日記発行の際に書評の形で簡単に日記を分析し、その資料の刊行を高く評価した。より鋭く主観的な評価として、2002年9月の『中央公論』誌上で坂野潤治が行ったものがあげられるが、そこでは宇都宮太郎がA級戦犯者の軸に位置づけられている。⁹⁾

他には、日記の刊行を準備する段階で、『宇都宮太郎関係資料研究会』が行ったシンポジウムの報告書や日記の解説文、または会員の論文などがあげられるが、それらは筆者の研究の始発点となった。

4. 宇都宮太郎が三・一独立運動の鎮圧で引き受けた役割

1919年3月1日の午後3時頃、憲兵司令官の児島惣次郎(1870-1922)は宇都宮に電話し、軍隊の臨時派遣を要請した。宇都宮は突然のデモの発生に対して驚くが、直ちに部隊を派遣した。夜になってソウルは安定し、これに宇都宮もひとまず安心した。彼は外国人宣教師ら

8) 良芳恵 (2007) 「刊行にあたって」, pp.ii, iii, ix; 宮本正明 (2010) 「宇都宮太郎と朝鮮支配」, pp.153-154 ; 徳馬については坂本龍彦 (1993) 『風成の人 宇都宮徳馬の歳月』岩波書店, pp.ii, 36

9) 伊藤成彦(2001)『物語日本国憲法第九条』影書房, 岡伸一(1978)『日本陸軍と大陸政策1906-1918』東京大学出版会, 坂野潤治(2002)「事実を曲げずに日本近代史に誇りを持たせる。戦前の人たちを反面教師とする教育は本当に有効か」『中央公論』117号

の扇動がデモの直接的な原因だと考え、「耶蘇教」の悪影響について述べた上で、朝鮮人の「無理に強行したる併合」にたいする不満について理解を示す。10)

次の日から朝鮮民衆のデモは激しく進められた。総督府の命令のない限り宇都宮は軍隊の派遣や再配置に反対した。そのような命令を望みながら、彼は軍隊の兵力強化を長谷川総督に願ひ出たが、長谷川はその必要性を自覚しなかった。それだけでなく、日本陸軍省もその必要性を感じることはなかった。かえって彼らは朝鮮人指導者が逮捕されればされるほど、デモも鎮静するだろうと思った。11)

しかし、彼らの判断は間違っていた。デモが激烈に続き宇都宮はついに3月11日、彼が望む方法で鎮圧過程に変化を与えることができる権利の許諾を受けた。その日の日記には、「此度は案外容易に」長谷川の賛成を得たと記されている。12) この背景には、原敬内閣総理大臣と長谷川との接触があった。原日記を参照すると、この日に朝鮮統治に関わる内容と、依然として効果の見られない三・一独立運動の鎮圧方法にたいして不満を表す内容がある。さらに、彼は電文で長谷川により厳しく効果的な鎮圧を要求したことが分かる。この日、宇都宮が「一般に軍隊しようとするの自由を」得たことはそのためであった。同じ夜、長谷川は宇都宮の権利拡大について原に知らせた。このようにして、長谷川が宇都宮の希望と原の要求を統一することができたのである。13)

まず、宇都宮は軍隊を広く派遣し新しい訓示を発表したが、その内容を簡略化すれば次のとおりである。一般の朝鮮人は少数の指導者の扇動のせいでのような行動に走ったのであるから、決して朝鮮民衆を悪く思ってはならない。朝鮮人と日本人は本来同族であるから、博愛仁慈と武士道で朝鮮人には同情心を持たなければならない。したがって、武器使用を厳しく制限する。

しかし、そのような訓示にもかかわらず、軍部隊は一層激しく朝鮮人を暴徒扱いするようになった。14) 4月1日、宇都宮は米国のAP通信から派遣されたJ. E. シャーキー(1877-1958)

10) 『宇都宮日記第三巻』1919年3月1日, pp. 220-221; 富田晶子 (1982) 「三・一運動と日本帝国主義」鹿野政直/由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第三巻, 日本評論社, pp.113-115

11) 『宇都宮日記第三巻』1919年3月2-4日, pp.222-223; 長田彰文 (2005) 『日本の朝鮮統治と国際関係: 朝鮮独立運動とアメリカ1910-1922』平凡社, pp.245-246, 262-263; 姜徳相編 (1966) 『現代史資料 25』みすず書房, pp.106-107(以下、『現代史資料 25』と略する; 松下芳男 (1977) 『暴動鎮王史』柏書房, p.231; 大江志乃夫 (1993) 『山県系と植民地武断統治』『岩波講座近代日本と植民地4 統合と支配の論理』岩波書店, p.26

12) 『現代史資料 25』, pp.106-107; 『宇都宮日記第三巻』1919年3月11日, pp.227-228; 松田利彦 (2009) 『日本の朝鮮植民地支配と警察: 一九〇五-一九四五年』校倉書房, pp.237-241

13) 『現代史資料 25』, pp.105-106; 原奎一郎編 (1965-1967) 『原敬日記』第五巻 福村出版, 1919年3月11日, p.76; 姜在彦(1992) 『日本による朝鮮支配の40年』朝日新聞社, pp.79-80

14) 『現代史資料 25』, pp.119-120; 『宇都宮日記第三巻』1919年3月18-22日, pp.230-233

記者¹⁵⁾と面談し、彼に「訓示」を渡しながら日本の朝鮮に対する好意を表明した。ところが、F.A.McKenzieの『Korea's Fight for Freedom』にあるように、宣教師は日本軍の暴力行動を見て「訓示」を偽善と受取り、不満が緩和するどころかさらに憤怒させた。しかし、宇都宮にはシャーキーや宣教師を騙す意図がなかったことは明らかである。¹⁶⁾

しかし、3月30日における長谷川との論議では、今後さらに厳しい鎮圧の必要性について同意していることも見過ごすことができない。面談の内容は詳しく記録されていないが、他の資料から、その背景に山県伊三郎(1858-1927)¹⁷⁾の東京出張があったことが分かる。山県は東京で原と面会し、宇都宮の独立運動の鎮圧がなかなか効果を上げていないことに不満を募らせていたのである。¹⁸⁾

「断乎たる処置を取るの必要に付」、長谷川と宇都宮「両者の意見略ぼ一致」と宇都宮は記録を残したが、皮肉にもその時点から長谷川と宇都宮の間に乖離が生じ始めた。「断乎たる処置」の要求の結果として、4月15日にチェアムリ(堤岩里)事件が発生したのである。周知の通り、日本軍が村のすべての男を教会に閉じ込めて尋問し始め、そのあと教会に放火したのである。その事件は日本軍がどれほど残忍だったかを示す事例とされているが、それよりさらに残忍なことも稀ではなかったという。¹⁹⁾

宇都宮はその事件はもとより、部隊の行動自体に対して衝撃を受けたが、はからずも長谷川は宇都宮にすべての責任を押し付けた。事件の処理に関する会議では、虐殺および防火事件として扱われず、朝鮮人の暴力に対する報復と合理化し、部隊の懲戒処分によって問題を終結しようとした。²⁰⁾ さらに、4月4日から宇都宮が懇願した朝鮮軍兵力増加が東京で論議され、当日決定された。15日には増力した軍隊の再配置がほぼ終了し、5月2日には完備された。²¹⁾

ところが、日記には6月22日まで、チェアムリ事件に関する内容が記されていない。その日は、長谷川が西洋宣教師たちに誤った話、つまり、宇都宮との合意に相反する話をしたため、その事件が再び世に取り沙汰されるようになったことに対する不平を綴っている。7

15) Joseph E. Sharkey(1877-1958)は1913-1921年の間、東京から東アジアのニュース情報を集めた人物であった。1933年までパリのAP支店で勤務し、1933年から1938年定年までジェニーヴァで軍務。The AP World (1956年秋号、1958年夏号), passim.

16) 『宇都宮日記第三巻』1919年4月1日, p.238; McKenzie, F.A.(1920) Korea's Fight for Freedom, Simpkin, Marshall & Co., p.273

17) 山県有朋の養子で、1910年から政務総監として総督府で軍務した。

18) 『宇都宮日記第三巻』1919年3月27-30日, pp.235-238

19) 長田彰文(2005) 『日本の朝鮮統治と国際関係: 朝鮮独立運動とアメリカ1910-1922』, p.250-253

20) 『宇都宮日記第三巻』1919年4月18-24日, pp.244-248

21) 上原勇作関係文書研究会編(1976) 『上原勇作関係文書』東京大学出版会, p.106

月14日の記録からはチェアムリ事件を起こした部隊の軍人たちの軍法会議裁判が開かれたことが分かる。22) 暴力事件を処分するのに相当時間がかかっているが、それは宇都宮と長谷川の間の相互不信から生じた結果だと言える。7月3日まで沈黙を維持し、当日、長谷川は宇都宮に彼の辞職を知らせた。その日は長谷川が日本に帰る前日だった。宇都宮はその行動に対して怒り、すべての責任を負って地位を退こうとしたが、次の日、日本から彼の辞職を受け入れないという便りが伝えられた。宇都宮は、まず新しい総督の赴任を準備せよとの命令を受けた。7月21日、宇都宮は上原勇作(1856-1933)²³⁾から東京で長州派の田中義一陸軍大臣が、宇都宮の権利違反について調査しているとの知らせを受けた。田中義一らが、チェアムリ事件を宇都宮の命じた事件とし、朝鮮人との交流など疑わしい行動を調査しているということを知り、それを誤解として訴えた。8月26日の日記からは、田中からの手紙によってその誤解が解消されたことがわかる。24)

9月2日、新総督の齊藤實が到着した。3日には軍法会議裁判でチェアムリ事件に対する判決があり、蛮行を犯した軍人が全て無罪判決を受けた事を知る。宇都宮は、日記では自分の責任について再考はしていないが、無罪判決によって責任から解放されたと思った。11月22日、宇都宮は東京出張中の際、天皇に謁見したうえ、田中義一から自分が将軍に昇進したことを知るが、それは長州派が宇都宮の動力を認めた証しと言えよう。25)

5. 宇都宮太郎の朝鮮人人脈

宇都宮は周囲の軍人、朝鮮に長く住んだ家族、朝鮮のさまざまな分野の名士の他、数多くの朝鮮人と交流した。日韓併合に大きな役割を果たした親日派の李完用(1856-1926)は宇都宮との交際を懇願したようだが、宇都宮は彼より朴泳孝(1861-1939)や宋秉畷(1857-1925)を優先した。また、尹致昊(1865-1945)とは日本滞在期間(1881年)から知る仲であり、日記

22) 『宇都宮日記第三卷』1919年6月22, 29日, p.271; 6月29日, p.274; 7月14日, p.281

23) 宇都宮と同じく九州生まれの上原は、宇都宮が軍隊の中もつとも信頼した軍人であった。

24) 吉良芳恵/宮本正明(2007)「第三卷解題 大正時代中期の宇都宮太郎第四師団長・朝鮮軍司令官・軍事参議官時代」宇都宮太郎資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第三卷 岩波書店, p.29; 『宇都宮日記第三卷』1919年7月21日, pp. 283-284, 8月26日, 9月1日, pp.295-299

25) 『宇都宮日記第三卷』1919年7月3-4日, pp.283-284, 7月21-22日, pp.275-277, 9月2-3日, pp.299-300, 11月22-25日, pp.334-336; 吉良芳恵/宮本正明(2007)「第三卷解題 大正時代中期の宇都宮太郎 第四師団長・朝鮮軍司令官・軍事参議官時代」, pp.30-33

には、彼が朝鮮政策に役立つ人として評価しているものの、39年ぶりの再開を大いに喜んだ。彼に助言を乞うと、尹致昊は宇都宮に崔南善(1890-1957)や李承晩(1875-1965)と連絡をとることを薦めた。宇都宮は、三・一獨立運動の獨立宣言書を作成した崔と上海の臨時政府に関わった李を説得できる自信を示しはしたが、彼らと会う努力をしたかどうかは日記から立証できない。26)

1919年2月27日、つまり3月1日の直前に、宇都宮が天道教の指導者の一人であった権東鎮(1861-1947)を訪問したことが分かる。権は宇都宮と面会し、高宗の国葬が開催される予定の3月3日に朝鮮人が排日示威を計っていると警告した。それは明らかに、宇都宮を騙す意図があったと思われる。獨立宣言書に調印した権は運動の開始が3月1日に決められていたことを知っていたはずである。宇都宮と面会することで、彼も宇都宮が朝鮮人の運動計画について知ったかどうか、確認したかったのであろう。いずれにしても、3月1日の記述に見れるように、宇都宮は天道教を見方にしようと考えていたが、この日から権と二度と会わないことにした。天道教教主の孫秉熙(1861-1922)は東学の合法化運動をすすめ、東学を天道教に改め、宗教的結社として合法化させた。孫は東学の政治的伝統を熟知しており、天道教設立以前から寄付などの親日的な活動をし、統監府と後の総督府の信頼を得ようとした。天道教徒の数が大きくなるにつれて、総督府はその動きを警戒したが、法律的手段ではなんらの対策もできなかった。宇都宮は天道教のそういう力をよく認識していたと思われる。27)

また、宇都宮は1896年に大韓帝国の軍人であった金応善(1881-1932)を宇都宮金吾の名前で弟として戸籍に入れた。そうすることで、彼が日本軍に入隊できるようにしたのである。さらに、宇都宮は金応善の恋人の日本人との結婚を推薦した。金は宇都宮の韓国での最も親しい友人であったため、宇都宮はだれよりもまして、彼と朝鮮統治の未来について語り、彼にアドバイスを頻繁に求めた。28) 金応善の例に見られるように、宇都宮はかなり早い時期から朝鮮人の日本軍隊入隊と日本人と朝鮮人の結婚の必要性を説いていたことが

- 26) 『宇都宮日記第二巻』1913年1月19-20日, p.185-186;1915年11月12日, p.552;『宇都宮日記第三巻』1918年8月19-21日, pp.138-140;1919年3月9日, pp.225-226;3月16日, p.229;3月22-26日, pp.232-235;4月5日 p.240;4月16-18日 pp.243-245;4月22日, p.247;7月17-18日, p.282;10月7日, p.316;10月2日, p.312; 10月9日, p.318, 12月12日, p.343;1920年1月14日, pp.356-357;2月1日, p.363
- 27) 『宇都宮日記第三巻』1919年2月27日、3月1日, p.220-221;3月3-4日, pp.222-223;김정인(2002)「孫秉熙의 文明開化路線과 3・1運動」『한국독립운동사연구』Vol. 19, pp.150, 158-159
- 28) 『宇都宮日記第一巻』1900年4月30日, p.76;1908年3月30日, p.141;1908年5月8日, p.148;7月27日, p.165; 11月20日, p.197;1910年1月30日, p.214;『宇都宮日記第三巻』1918年月18日, p.126;7月27日, p.129; 9月29日, p.158; 3月9日, pp.225-226

わかる。内鮮結婚は、1931年から「内鮮一体論」と「皇民化政策」の一環として唱えられたが、社会的差別も少なくなく、その後総督府が安定した結婚政策を建てられないほど、日本・朝鮮両側に違和感のある概念であった。また、朝鮮人の為の軍隊入隊願制は1938年から始まり、1944年からは朝鮮人の徴兵が始まった。²⁹⁾

結局、宇都宮は彼の思想と立案を肯定的に受け入れた親日的な朝鮮人を深い反省もなしに、「同土」として迎えていたのである。

6. 宇都宮太郎の朝鮮認識

宇都宮は3月1日の日記で、三・一独立運動の発生理由が日本の統治政策の失策にあるとしている。彼は日本帝国は朝鮮人から真の感謝の心を得れなかったことを始めとして、朝鮮人の状態をどのようにすれば改善できるかについて、朝鮮人の友人、日本人の上司や部下など、信頼できる人々の意見を聞きながら、自らの思想を発展させていった。ついに5月17日には田中義一陸軍大臣(1864-1929)に意見書を送った。³⁰⁾

「朝鮮時局管見」と題されたその意見書は、12事項に分けて朝鮮統治に関する宇都宮の私見を表明し、具体的な統治改革案を披瀝した。それは、朝鮮人が生活のあらゆる分野で差別を受け、日本人と同じレベルの待遇を受けていないという内容を説明したものだ。朝鮮を永遠に日本の土地とするためには、まず、日本と同じ府県町村制度に変えるべきだとした。³¹⁾ それから、憲兵の役割、朝鮮警察の改革について論じ、地域的な民間警察制度の必要性を説明した。この中で最も目につくのは、1919年に朝鮮人も日本軍隊に入隊できるようにしようという主張である。宇都宮は軍隊志願制の導入を大日本帝国憲法の朝鮮での適用の第一歩と考えたのである。大日本帝国憲法を朝鮮に適用することは、朝鮮人を軍人として確保できるということ以前に、三・一独立運動で抵抗した朝鮮人たちを日本軍人にすることで容易に説得できると考えたのである。³²⁾

さらに、彼は朝鮮の軍隊再配置についても論じ、日本人を朝鮮に移民させる政策を積極

29) 장용경(2007) 「일제 말기 内鮮結婚論과 조선인 육체」 『역사문제연구』No.18, pp.196-200; 朴慶植(1973) 『日本帝国主義の朝鮮支配』(下巻) 青木書店, pp.26-28

30) 例として、『宇都宮日記第一巻』1919年3月24-28日をあげる事ができる, pp.233-236

31) 宇都宮太郎(1919) 「朝鮮時局管見」 『斎藤実文書第13巻—朝鮮総督時代関係資料』(1990)高麗書林(以下、「朝鮮時局管見」と略する), pp.97-100

32) 「朝鮮時局管見」, pp.104-111; 姜在彦(1992) 『日本による朝鮮支配の40年』, pp.170-175

的に進める必要性を説いた。また、朝鮮では宗教が重要な役割をしていることに注目し、宗教に対する政策、すなわち天道教に対する対策として、日本仏教と日本キリスト教を朝鮮半島に導入することを提案した。さらに朝鮮語が上手な西洋宣教師は帝国の友人にすべきであるという言及もある。最後の二つの事項で、宇都宮は朝鮮人の差別に関する詳細な分析を行い、日本の支配制度の全ての面における朝鮮人の差別を明らかにしている。社会生活においても個人生活においても差別されている朝鮮人は、日本人と教育上、職業上、同じ機会を得られるようにすべきであると説いた。長く綴られた文章の文末で、彼は朝鮮は二度と独立国にはなれないことを強調している。松田利彦が指摘するとおり、要するに宇都宮は丹念な改革計画を提出したわけである。³³⁾

彼の意見表明は、軍隊の領域に留まらず、より多くの人々に向かって積極的に行われた。例えば彼は自分の信頼した人に、「本願」という小さなメモを与えた。そのメモの内容は次のとおりである。日本、中国と朝鮮の深い関係を信じ、その国々の平和と繁栄のために、まず朝鮮と日本は一つの国に融合すべきである。宇都宮はこのような理想的な言葉で、彼の基調戦略を語ったのである。朝鮮人の「独立精神」をなくすために、朝鮮人の考えを「共同共存」というスローガンで変えようとした。そして、次のような宣伝を準備した。³⁴⁾

彼はペンネームを使いながら20ページのほどの「警世危言」という小冊子を出版し、個人的に流通させた。宇都宮はここで彼の世界観を説明し、朝鮮はなぜ日本を必要とするのかに関するさまざまな理由を提示した。キリスト教徒の白人の帝国は世界を支配するために、日々影響力を拡大させているが、中国と朝鮮は国民精神がないため、白人帝国の犠牲になりやすいという。それで朝鮮と日本が一つの国と感じられるようになれば、白人帝国の影響力から免れることができるとした。それによって、世界の全民族が兄弟になれるだけでなく、差別もなくなると説いた。これは第一次世界大戦にいたる時期の宇都宮の世界観をよく表している資料だといえるだろう。宇都宮は進化論の用語(例えば、弱肉強食など)を直接使わず、「人種競争」という言葉でダーウィニズムに近いスタンスを明白に示している。³⁵⁾

1919年6月12日、宇都宮が書いた、しかし作者未詳の「内鮮の関係」という文が大阪毎日新

33) 「朝鮮時局管見」, pp.111-126; Matsuda Toshihiko(2011) Governance and Policing of Colonial Korea 1904-1919, pp.184-185

34) 『宇都宮日記第三巻』1919年3月8-9日, p.225; 3月20-22日, pp.231-232; 吉良芳恵/宮本正明(2007) 「第三巻解題 大正時代中期の宇都宮太郎 第四師団長・朝鮮軍司令官・軍事参議官時代」, pp.24-25

35) 宮本正明(2010) 「宇都宮太郎と朝鮮支配」, pp.158-159, 177; 中城正(1919) 『警世危言』新生堂

間に掲載されることになった。その後、同じ文が韓国語訳され、他の新聞にも掲載された。そこで宇都宮は朝鮮を日本の夫人になぞらえて、日本と韓国の関係を語っている。日本は朝鮮と無理に性急な結婚をした。結婚直後は結婚生活に慣れていなかったため夫人は頻繁に離婚を要求したが、新郎は離婚を受け入れなかった。しかし、新郎は婦人が結婚生活に慣れるまで忍耐して待ち、心から結婚を受け入れるまで努力すべきだとした。ここで宇都宮は、男がその女と結婚したが他の男たちが周囲にいたため急いで結婚をしたことに注意を促している。もし離婚を許諾でもしたなら、その女はすぐにでも他の男と再婚する可能性があるので許諾は絶対にできないというのである。最後の部分で宇都宮は、他の男たち、つまり中国とロシアについても述べているが、朝鮮という夫人に最も適合した夫は、日本以外にはあり得ないという確信で結論を結んでいる。このような比喩はここに始まったわけではなく、すでに3月1日の日記でも見ることができるが、ここでは「無理に」などの言葉は使っていても、「強制結婚」という表現は避けていた。³⁶⁾

長谷川総督は辞職するとき、将来、朝鮮をどのように統治すべきかに関する意見書を残しているが、その内容は宇都宮の見解とよく似ている。例えば満州との境界に送られている義兵との戦いなどに関する見解は基本的に宇都宮の考えを改めて述べているといつてよいだろう。特に朝鮮人の差別についての見解には宇都宮の影響が見れる。³⁷⁾

長谷川の後任者として、退職した海軍将軍の齋藤實(1858-1936)が1919年9月2日に到着した。万全の対応をしたにもかかわらず、齋藤を暗殺する試みがあった。齋藤が赴任するとき宇都宮は二つの理由で疑わしく思った。まず、海軍出身の齋藤が陸軍の問題をまともに扱えるとは思えなかったからである。もう一つは、長谷川との不快な経験から、この新しい上司ともうまくやっていく自信がなかったからである。しかし、宇都宮は暗殺計画を契機に彼を調べた後、齋藤と急速に親しくなる。日記から見れるように、10月-12月の間、特に彼らは今後の朝鮮の土地政策について深く論議している。³⁸⁾

1920年1月31日にThe Independent紙に英語で作成した齋藤の“Home rule in Korea?”という記事が載せられたが、その内容に宇都宮の影響がよく窺える。英語で文を載せること自体

36) 宇都宮太郎(1919.6.12)「内鮮の関係」『大阪毎日新聞』;宮本正明(2010)「宇都宮太郎と朝鮮支配」, p.176

37) Devine, Richard(1997) “Japanese Rule in Korea after the March First Uprising: Governor General Hasegawa’s Recommendations” Monumenta Nipponica, Vol. 52 No. 4, p.526

38) Caprio, Mark E.(2009) Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945, University of Washington Press, p.123-126; 長田彰文(2005)『日本の朝鮮統治と国際関係: 朝鮮独立運動とアメリカ1910-1922』, pp.256-258; 吉良芳恵(2005)「宇都宮太郎関係資料からみた三・一独立運動 陸軍中央との関係を中心に」, pp.157-160;『宇都宮日記第三巻』1919年9月2-3日, pp.299-300;9月25日, pp.309-310;10月3日, p.313;10月6日, p.315;12月4-5日, p.340-341

は、西洋宣教師と記者による世論の影響力を無くすための宇都宮の対策であった。斎藤はその記事で、彼の政策改革を紹介しながら韓日合併を正当化し美化した。警察改革や教育制度改革についても誇らしく語り、日本の資金による学校と病院の増設についても言及した。新しい政策の目標はひたすら朝鮮人の幸福という言葉で表現し、斎藤は朝鮮人から感謝の心を期待した。宇都宮はすでにデモの最初の日、すなわち3月1日の日記で、朝鮮人が悦服をしないので、まず彼らから感謝の心を引き出すべきとしている。また、斎藤は宇都宮と同じように、日本人との差別撤廃を記事で主張している。ある程度予想できるように、記事の末に斎藤は朝鮮人に“at some opportune time in the future”という言葉で、朝鮮の内政自治を約束した。このような一連の主張は、宇都宮が1919年5月の意見書に含まれた内容と似ている。³⁹⁾

宇都宮の資料を読んでもと、彼の思想と原敬が提案した「内地延長主義」との類似性も注目される。彼らは電文をやりとりすることによって知りあうことになった間柄だったが、1919年9月17日、宇都宮の東京出張中には直接会う機会ができた。宇都宮の日記には面談の内容についてほとんど見られないが、原の日記には対話の要点が綴られていた。朝鮮の獨立精神が過小評価されているため、朝鮮半島の兵力増強が切実であり、朝鮮人は20年余りにわたる継続した差別待遇に耐えきれないであろうと言及している。これらから宇都宮と意見を共にしていることが分かる。もちろん、宇都宮が原に直接的な影響を及ぼしたとはいえないだろう。それにもかかわらず、朝鮮で相当な影響力を持つ軍人宇都宮と軍隊の政治力に強く反対した民間政治家の間に、相違性よりむしろ類似性が多かったという事実は注目に値する。さらに、宇都宮に影響を受けた斎藤もやはり原と直接的な関係があったので、斎藤は原と宇都宮の影響を間接的に受けたと言えるだろう。⁴⁰⁾

7. おわりに

宇都宮が良心的に朝鮮人の生活環境の改善を計ったという事実は疑い得ないとしても、

39) 『宇都宮日記第三卷』1919年3月1日, pp.220-221; Saitō, Makoto(1920.1.31), “Home rule in Korea”, *The Independent*. 167-169, p.191; 宮本正明(2010) 「宇都宮太郎と朝鮮支配」, pp.172-173

40) 『原敬日記』第五卷, 1919年9月17日, pp.145-146; 原敬「朝鮮統治私見」, 森山茂徳(2005) 「日本の植民地支配と朝鮮社会 植民地統治と朝鮮人の対応」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書』日韓文化交流基金により引用, pp.23-24; 『宇都宮日記第三卷』1919年9月17日, pp.306-307

最終的には、朝鮮民衆の希望と欲念を把握できていなかったといえる。彼は数多くの朝鮮人と交流はしたが、その朝鮮人は彼の構想する朝鮮統治を奨励してくれる人物に限っていた。彼の帝国主義的な視角を十分に批判できる者がいたとしても、そのような人物とは会わないようにした。彼は、三・一独立運動という形で噴出した朝鮮人の不満の原因を日本帝国の朝鮮統治の失策や、あるいは「無理に強行した併合」に求めたが、併合自体は不可欠なものとした。日本は朝鮮との「結婚」に性急だったことを認めることはあっても、その結婚自体は両国のために最もよい選択と考えた。日本側の代表として、日本人の「融合」のための努力を朝鮮に認めてもらうことを欲しており、同時に朝鮮側にもそのように努力を求めたのである。3月1日運動の開始当日に、それを独立運動と認識はしていたが、その「独立」が朝鮮人にとってどのような意味を持つのかは問わなかった。運動の発生は朝鮮人民衆ではなく、少数の指導者と外国人宣教師の責任にした。

それにも関わらず、宇都宮は朝鮮統治に於ける問題点を見事に把握した。彼が書いた意見書や周りの郡院との面会で表明した見解から分かるように、彼は未来の朝鮮統治について効果的な提案をしたのである。そのような意識をもとに、彼には二つの課題があった。一つは、自らの思想を宣伝して外国人宣教師と記者に対する対策を講じることであり、もう一つは彼の改革提案を上司に受け入れさせることであった。⁴¹⁾

宇都宮は新しい政策に関する案を一人で作ることはなかったが、その過程で日本人の人脈だけでなく、身近に接した朝鮮人たちにも思想的に影響を及ぼした。それは基本的に日本のアジア主義に立脚し、日本の指導的な役割を強調したものであった。天皇制を支持する宇都宮にとって、脱植民地化は想像だにできないことであり、したがって彼は朝鮮統治政策を再考させるのではなく、むしろ反対に発展させようとした。要するに、宇都宮は日本の伝統的な朝鮮観を克服できず、朝鮮は中国の属国であり続け、自主独立国でなかったと理解したのである。彼にとって「朝鮮」は政治性のある国家ではなく、地名に過ぎなかったと言えるだろう。

もちろん、宇都宮は朝鮮人と日本人の間の差別を撤廃すべきであると常に論じていたが、実際はそれ自体がそのような差別を克服できていなかった。朝鮮と日本の文化水準の差や日本の文明的優越性を信じ、朝鮮人の渴望する独立の可能性を封じ込めかつ無視した。事実、これより大きな差別はない。宇都宮は、日本帝国の誤った統治方法に対する朝鮮人の抵抗を認めたが、独立に対する抵抗は容認しなかった。

41) 『宇都宮日記第三巻』1919年3月4日, p.223

先に言及した宇都宮の日-韓の結婚という比喩にも、彼の認識の限界が明確に現れている。朝鮮は女であり男より劣った立場におかれているため、そもそも本来的な意味での融合はあり得ない。彼は朝鮮人を日本帝国の市民として、同じ水準から見ようとせず、最後まで植民地開拓者としての自らのアイデンティティを守ったのである。1919年4月18日も朝鮮人が彼の馬車に投石したことが他の資料からわかるが、それは日記に言及されていない。その理由が朝鮮人の行動に悪感情を抱いていなかったからなのか、あるいは彼らが宇都宮を敵視することを認めたくなかったからなのかは知る術がない。42)

軍人として宇都宮は他の何よりも国家の安定を憂えた。日韓併合に際して、日記で彼は感激を表さず、冷静に併合による安定を喜んだ。彼は死ぬまで朝鮮半島における軍事力の拡張を支持しただけでなく、帝国の延長にも声援を送った。他のどの日本人支配者よりも朝鮮人の立場で考えてみようとした彼だったが、ただの一度も日本の監獄で苦痛で苦しむ朝鮮人たちを見て回ることはなかった。結局、斉藤や宇都宮などの「文化政策」は、1931年の中国侵略に始まる帝国日本の朝鮮半島における「同化政策」の一つのステップに過ぎなかったのである。43)

【参考文献】

- 김정인(2002) 「孫秉熙의 文明開化路線과 3・1運動」 『한국독립운동사연구』 Vol. 19
 장용경(2007) 「일제 말기 內鮮結婚論과 조선인 육체」 『역사문제연구』 No. 18
 伊藤成彦(2001) 『物語日本国憲法第九條』 影書房
 上原勇作関係文書研究会編(1976) 『上原勇作関係文書』 東京大学出版会
 宇都宮太郎(1919) 『朝鮮臨時局管見』 『斉藤実文書第13巻—朝鮮総督時代関係資料』 高麗書林, 1990
 宇都宮太郎資料研究会編(2007) 『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』 岩波書店
 大江志乃夫(1993) 『山県系と植民地武断統治』 『岩波講座近代日本と植民地4 統合と支配の論理』 岩波書店
 姜 在彦(1992) 『日本による朝鮮支配の40年』 朝日新聞社
 姜 徳相編(1966) 『現代史資料 25』 みすず書房
 岡伸一(1978) 『日本陸軍と大陸政策1906—1918』 東京大学出版会
 吉良芳恵(2005) 「宇都宮太郎関係資料からみた三・一獨立運動 陸軍中央との関係を中心に」 『史艸』 46号
 _____(2007) 「刊行にあたって」. 宇都宮太郎資料研究会編(2007) 『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮

42) 『現代史資料25』, p.380;長田彰文(2005) 『日本の朝鮮統治と国際関係:朝鮮獨立運動とアメリカ1910-1922』, p.229
 43) 『宇都宮日記第一卷』1910年8月22日, 29日, pp.364-366;姜在彦(1992) 『日本による朝鮮支配の40年』 pp.57, 106;Caprio, Mark E.(2009) Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945, pp.29-31, 47-48;Huntington, Samuel P.(1994) The Soldier and the State. The theory and politics of civil-military relations, Belknap Press, p.v-vii, 1-3;宮本正明(2010) 「宇都宮太郎と朝鮮支配」, p.172, 高宮太平(1971) 『順逆の昭和史 : 2.26事件までの陸軍』 原書房, p.20

- 太郎日記』第一卷、岩波書店
- 吉良芳恵/宮本正明(2007) 「第三卷解題 大正時代中期の宇都宮太郎 第四師団長・朝鮮軍司令官・軍事參議官時代」宇都宮太郎資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大將宇都宮太郎日記』第三卷 岩波書店
- 斎藤聖二(2007) 「第一卷解題 明治期の宇都宮太郎 駐英武官・連隊長・參謀本部第二部長」宇都宮太郎資料研究会編(2007) 『日本陸軍とアジア政策 陸軍大將宇都宮太郎日記』岩波書店
- 坂本龍彦(1993) 『風成の人 宇都宮徳馬の歲月』岩波書店
- 高宮太平(1971) 『順逆の昭和史：2.26事件までの陸軍』原書房
- 長田彰文(2005) 『日本の朝鮮統治と國際關係 朝鮮獨立運動とアメリカ1910-1922』平凡社
- 中城正(1919) 『警世危言』新生堂
- 原奎一郎編(1965-1967) 『原敬日記』福村出版
- 坂野潤治(2002) 「事実を曲げずに日本近代史に誇りをを持たせる。戦前の人たちを反面教師とする教育は本当に有効か」『中央公論』117号
- 朴慶植(1973) 『日本帝國主義の朝鮮支配』(下卷) 青木書店
- 松下芳男(1977) 『暴動鎬王史 柏書房
- 松田利彦(2009) 『日本の朝鮮植民地支配と警察 一九〇五-一九四五年』校倉書房
- 宮本正明(2010) 「宇都宮太郎と朝鮮支配」安田常雄、趙景達編 『近代日本のなかの韓国併合』東京堂出版
- 森山茂徳(2005) 「日本の植民地支配と朝鮮社会植民地統治と朝鮮人の対応」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書』日韓文化交流基金
- Caprio, Mark E.(2009) *Japanese Assimilation Policies in Colonial Korea, 1910-1945*, University of Washington Press
- Devine, Richard(1997) “Japanese Rule in Korea after the March First Uprising: Governor General Hasegawa’s Recommendations“ *Monumenta Nipponica* Vol. 52 No. 4
- Huntington, Samuel P.(1994) *The Soldier and the State. The theory and politics of civil-military relations*, Belknap Press.
- Matsuda, Toshihiko, *Governance and Policing of Colonial Korea 1904-1919*, Kyoto: Nichibunken, 2011.
- McKenzie, F.A.(1920) *Korea’s Fight for Freedom*, Simpkin, Marshall & Co.
- Saitō, Makoto(1920.1.31), “Home rule in Korea”, *The Independent*.
- Smith, Sidonie, Watson, Julia(2001) *Reading Autobiography. A Guide for Interpreting Life Narratives*, Minneapolis: University of Minesota Press.
- The Associated Press (ed.), *The AP World*, 1956 Autumn, 1958 Summer

논문투고일 : 2012년 06월 10일
 심사개시일 : 2012년 06월 20일
 1차 수정일 : 2012년 07월 10일
 2차 수정일 : 2012년 07월 20일
 게재확정일 : 2012년 07월 25일

〈要旨〉

宇都宮太郎将軍の三・一独立運動の鎮圧過程に見られた朝鮮認識

宇都宮太郎(1861-1922)は1918年から1921年まで朝鮮の軍司令官だった。三・一独立運動を鎮圧することが彼の責任であったが、当時、彼は毎日日記を詳しく書いたので、彼の日記を通して三・一独立運動の鎮圧過程をよく見ることができる。本稿でまず、宇都宮の生涯と彼の日記をどうみたかを紹介し、彼が三・一独立運動の鎮圧過程で受け持った役割について説明した。宇都宮は武力鎮圧を指導したにもかかわらず、朝鮮人との親密な交流を持っていたため、自分が朝鮮人の心やおかれた状況を把握していたと信じていた。その信頼を土台に、彼は暴力ではなく、改革の必要性を訴え、そのような思想を流布した。彼が書いた文からみた彼の思想と朝鮮に対する認識、すなわち宇都宮が「文化政策」に及ぼした影響を説明し、宇都宮の上司に対する影響力を調べた。

General Utsunomiya Tarō and his role in subduing the March First Movement of 1919 as seen in his diary and his other texts

This article examines Utsunomiya Tarō's (1861-1922) role in subduing the March First Movement of 1919 in Korea and tries to give an insight into Utsunomiya's perceptions regarding Korea and its role as a Japanese colony. Utsunomiya was General-in-Command (gun shireikan) of the Japanese troops in Korea from 1918 to 1921 and thus he was in a crucial position for dealing with the March First Movement. Utsunomiya saw the movement as assemblies of "blind masses" following only a few leaders. Thus he tried to limit the use of violence against the masses. Nevertheless brutalization escalated, as can be seen in the Cheamni Massacre of April 15th 1919, when twenty-nine men were trapped inside a church that then was set on fire by Japanese troops, causing the men to burn alive. Arguing against the Western Missionaries who tried to make the allegedly barbaric behavior of the Japanese public in the world press, Utsunomiya himself wrote several memoranda and articles about his views on the Korean peninsula, working out strategies to "pull the Koreans over" to the Japanese side, all the while trying to defend himself and his troops against what happened in Cheamni. It will be argued that Utsunomiya, as a military-intellectual, played a crucial role in working out the basic guidelines of what was later to become institutionalized as the "Cultural Policy" (bunka seiji) of colonial rule in Korea, and also exercised a traceable influence on his superiors.